

253 扁平上皮癌と腺癌の組織型と予後

—主として分化度との相関—

国立療養所近畿中央病院外科¹, 病理²

○一宮昭彦¹, 山本暁², 稲田啓次¹, 山本元三¹
堀田隆久¹, 多田弘人¹, 井内敬二¹, 森隆¹

目的：肺癌のほぼ9割を占める扁平上皮癌と腺癌においてその組織型、主として分化度が病期にどのように相関し予後に影響を与えているか検討した。

対象：昭和50年から59年までに当院にて切除された肺癌症例 522例中、扁平上皮癌 246例、腺癌 216例で、このうち術前加療のため腫瘍が消失あるいは変性したため組織型の判定不明の4例を除いた 458例を対象とした。

結果：扁平上皮癌では高分化：81, 中分化：94, 低分化：68。腺癌では高分化：80, 中分化：64, 低分化：82で、腺管型：67, 乳頭型：139, 肺胞上皮細胞型：9である。

予後に関して、扁平上皮癌では高分化が中低分化に比べてやや予後が良い程度で差はないが、腺癌では高分化に比べて中低分化は悪く、5生率で49%, 23%, 27%である。腺管型と乳頭型では予後に差は認めない。

腺癌の分化度と病期は高分化のⅠ期56%, Ⅱ期15%, Ⅲ期23%に対して、中分化ではⅠ期22%, Ⅱ期14%, Ⅲ期56%, 低分化ではⅠ期21%, Ⅱ期11%, Ⅲ期61%であり、中低分化では病期の進んだ例が多い。さらに予後の良いT₁N₀M₀ 45例は高分化60%, 中分化24%, 低分化11%の割合であり、反対に予後不良のT₁N₂M₀ は高分化1例, 中分化7例, 低分化6例である。

結論：扁平上皮癌は分化度において差はないが、中低分化腺癌は進行例が多く予後不良の原因となっている。

255 進行非小細胞肺癌(NSCLC)組織型と予後

大阪府立羽曳野病院第2内科¹, 病理²

○酒井直道¹, 福岡正博¹, 根来俊一¹, 滝藤伸英¹, 松井 薫¹, 楠 洋子¹, 高田 実¹, 劉 震永¹, 益田典幸¹, 森野英男²,

目的：現在、扁平上皮癌(Sq), 腺癌(Ad), 大細胞癌(La)は、NSCLCとして一括して取扱われている。我々は化学療法を行なった切除不能NSCLCについて、組織型別にその効果と予後の検討を行なった。

対象・方法：過去5年間に化学療法のprotocol trialに登録した切除不能のNSCLC 207例を対象とした。男155例, 女52例, 平均年齢62.4才で、組織型はSq 89例, Ad 100例, La 19例で臨床病期はⅢA 106例, ⅢB 28例, IV 73例であった。治療内容はCDDP単独41例, CDDP+VDS 57例, CDDP+VDS+MMC 76例, CDDP+etoposide→VDS+MMC 33例であった。これら組織型について各種予後因子別に奏効率と予後を検討した。

結果：①全体の奏効率；Sq 39%, Ad 25%, La 44%。全体の生存期間中央値(MST:月)；Sq 8.8, Ad 10.1, La 10.7 ②男性のMST；Sq 8.8, Ad 8.2, La 6.4。女性のMST；Sq 7.2, Ad 15.1, La 10.7 ③PS 0~1のMST；Sq 11.4, Ad 12.6, La 12.2。PS 2~3のMST；Sq 7.2, Ad 5.3, La 4.2 ④臨床病期ⅢAのMST；Sq 12.1, Ad 10.3, La 11.7。ⅢBのMST；Sq 6.8, Ad 12.3, La 3.7。IV期のMST；Sq 7.2, Ad 8.8, La 10.7。

結語：組織型別の奏効率ではSq, LaがAdより優れていたが、MSTには差は認めなかった。女性及びⅢB, IV期ではAdの予後が良い傾向にあったが、PSでは全ての組織型で0~1の方が予後良好であった。

254 Ⅰ期非小細胞癌の組織型と予後

長崎大学第2内科¹・第1外科²

○神田哲郎¹, 広瀬清人¹, 早田 宏¹, 木下明敏¹, 谷口哲夫¹, 力竹輝彦¹, 鶴川陽一¹, 松本好幸¹, 河野謙治¹, 岡 三喜男¹, 原 耕平¹, 川原克信², 綾部公懿², 富田正雄²

昭和50年より昭和61年までに当科に入院し、その後切除された肺癌のうち、Ⅰ期の扁平上皮癌と腺癌の組織型及び核の偏位係数の予後に与える影響について検討した。

対象と方法：病理学的Ⅰ期は扁平上皮癌26例、腺癌55例であり、日本肺癌学会規約にのっとり組織型分類を行った。また、核の偏位係数は以下の方法で求めた。即ち、160倍で白黒顕微鏡写真をとり、これを8倍に引き伸ばした。その後、デジタイザー(WT-4400SE)で、各症例につき約100個の核の面積を測定した。核の偏位係数は標準偏差をその平均値で割り、100を掛けたものである。生存曲線はKaplan-Meier曲線を描き、一般化Wilcoxonテストで有意差検定を行った。

結果：扁平上皮癌では分化度別生存曲線に有意差は見られなかったが、腺癌では高分化型に生存期間の延長がみられた(0.05>P)。一方、核の偏位係数においても、扁平上皮癌では差はみられなかったが、腺癌では核の偏位係数の小のものほど予後良好であった(0.05>P)。結論：組織型は、Ⅰ期腺癌では予後因子となりえたが、Ⅰ期扁平上皮癌においては予後因子となりえなかった。

256

原発性肺癌における ras 癌遺伝子産物の発現と予後についての検討

北海道大学医学部第一内科¹、付属病院病理部²

○原田真雄¹、堂坂弘俊¹、羽田 均¹、石黒昭彦¹、清水 透¹、磯部 宏¹、荒谷義和¹、宮本 宏¹、川上義和¹、遠藤隆志²

〔目的・方法〕我々は昨年の本学会において、葛巻らによって作製された、ras 癌遺伝子産物(p21)に対するモノクローナル抗体rp-35を用いて、肺癌組織における ras p21の発現とTNM分類との関係を免疫組織化学的に検討し報告した。

今回は原発性肺癌手術症例73例のホルマリン固定パラフィン包埋切片を用いてrp-35による免疫染色(ABC法)を行ない、ras p21の発現とTNM臨床病期分類及び予後との関係について検討した。

〔結果〕T2・T3症例はT1症例に比べてrp-35に対して高反応性を示す傾向があり、N1・N2症例はN0症例よりも有意に高反応性を示した。またⅢ・Ⅳ期症例はⅠ・Ⅱ期症例よりも有意に高反応性を示した。

rp-35に対して高反応性を示した群(31例)の5生率は29.5%、低反応性を示した群(23例)の5生率は65.2%であり有意差を認めた。治癒切除症例における両群の5生率はそれぞれ40.0%, 72.7%であった。

〔結論〕抗 ras p21モノクローナル抗体rp-35を用いた免疫組織化学的検索は、原発性肺癌の悪性度や予後の推定に有益であると思われる。